OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ビュッシング『週報』誌におけるケンペル『日本誌』出版報道（前編）
Author(s)	中, 直一
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2009, 9, p. 35-42
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/73820
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ビュッシング『週報』誌におけるケンペル『日本誌』出版報道（前編）

中　直一

1　はじめに

本論文は、地理学者で神学者のビュッシング(Anton Friedrich Büsching, 1724-93)[1]が編集・発行した『週報』（Wöchentliche Nachrichten von neuen Landcharten, geographischen, statistischen und historischen Büchern und Sachen）に1773年から1779年にかけて掲載された、ケンペル『日本誌』ドイツ語版出版についての報道記事12本を分析し、啓蒙期ドイツにおける学術雑誌が、異文化に関する学術図書の出版についてどのような報道をなしていたのかを考察することを目的とする。

周知のように元禄時代に来日したケンペル（Engelbert Kaempfer, 1651-1716）は、日本についての膨大な観察記録を残したが、その原稿を印刷刊行することなく没した。原稿はケンペルの死後、甥の手によってイギリスの収集家ハンス・スローン(Hans Sloane, 1669-1753)に売却されたが、スローンはこの原稿の整理および翻訳をロンドン在住のスイス人ショイヒツァー(Johann Caspar Scheuchzer, 1702-29)に依頼した。ショイヒツァーによる英訳が出版されたのは1727年のことである。すなわちケンペルがドイツ語で書いた日本論は、まずその英訳が出版されるという事態になったのである。

ドイツ語版が印刷刊行されたのは1777年（上巻）および1779年（下巻）のことである。英訳版に遅れること半世紀にして、ようやくドイツ語が出版された。ケンペルと同じレムゴ出身のドーム(Christian Wilhelm von Dohm, 1751-1820)がドイツ語原稿を編集し刊行したものである。上に記したように、ケンペルの原稿はイギリス人スローンに売却され、その原稿は現在も大英図書館に存在する。ドームがドイツ語版刊行の際に依拠したのはこれとは別種の原稿であり、ドーム自身の言によれば「しかし実際には２つの手書き原稿が存在しており、それが半世紀の間、ケンペルの唯一の最終相続人である姪のところに埋もれていたのである」[2]、すなわちスローンに売却された原稿とは別の原稿が存在した、ということになる。

レムゴで再発見された原稿とスローンに売却された原稿の関係については近年研究が進み、筆者も何度かこれについて言及したことがある[3]。本稿では、レムゴにおいてケンペル自筆原稿が現存することをいち早く伝え、ドームによる『日本誌』編集・出版を後見したビュッシングに着目し、彼が発行する学術雑誌においてどのように原稿発見の経緯が報告されたのか、またドーム版発行に至るまでにいかなる問題点が存在したのか、『週報』誌に掲載された記事によりつつ紹介・分析してゆきたい。

以下にケンペル『日本誌』関係の記事が掲載された『週報』誌の巻・号と発行の日付を記す。

1．　第1巻第30号、1773年7月26日

2．　第1巻第32号、1773年8月9日

3．　第1巻第33号、1773年8月16日
4．　第2巻第22号、1774年5月30日
5．　第2巻第46号、1774年11月14日
6．　第3巻第6号、1775年2月6日
7．　第3巻第15号、1775年4月10日
8．　第4巻第34号、1776年8月19日
9．　第5巻第12号、1777年3月24日[4]
10．　第5巻第26号、1777年7月30日
11．　第7巻第7号、1779年2月15日
12．　第7巻第36号、1779年9月6日

このように『週報』誌には、ケンペルの原稿が再発見された1773年からドーム版の下巻が発行される1779年に至る7年間に、ほぼ毎年のように合計12本の記事が掲載されている。本論文では、これらの記事を、その内容のテーマに従って分析を試みたい。

2　発見された原稿とその真贋鑑定

ケンペルの原稿発見を伝える最初の記事は、『週報』誌1773年7月26日号に掲載された。そこではいささか高揚した調子で、次のように報ぜられている。

> 「日本国の自然、国民、宗教に関するエンゲルベルト・ケンペル博士の記述に関しては、イギリスで同国の言語に翻訳され、英語からヨハン・カスパール・ショイヒツァーによりフランス語に訳されていた。だが、印刷されていないドイツ語のオリジナルがレムゴに存在しているのであり、ある有名な書肆がそれを購入の上、さらに印刷によってドイツ人に伝達しようと計画している。このことは、歴史学と地理学を愛好するあらゆる人士にとって、ひとつの欣快なる報道であるに違いない。」（26.7.1773, S.239）[5]

地理学者であるビュッシングが、日本の地理に関する情報を含む『日本誌』について、原稿発見以前から何がしかの情報を有していたであろうことは、容易に想像が付く。しかし1773年の段階では、まだ『日本誌』英語版およびフランス語版についての書誌的な情報については詳しくなかったようである。上の引用では、英訳者の氏名が記されず、仏訳者としてショイヒツァーの名前が記されている。実際にはショイヒツァーは英訳者であって、仏訳を為したのは別人である。本論文の以下の部分で見てゆくように、ビュッシングは上の記事よりあとの記事においては、ショイヒツァーが英訳と仏訳の両方を為したとの記述もしていて[6]、結局ビュッシングは最後の1779年の記事に至るまで、ショイヒツァーが英訳のみを為したという正しい情報を伝えていない。

上の引用文において「ある有名な書肆」と記されているのはレムゴのマイヤー書店であり、実際ドーム版の『日本誌』はマイヤー書店から出版されている。ただ、ビュッシングがマイヤー書店に原稿出版

を持ちかけたかどうかは、上の引用文では不明である。また1777年刊行の『日本誌』（上巻）に掲載された編集者ドーム自身による「刊行者の序文」においても、この間の事情は不明確である。上のビュッシングの文書を読めば、マイヤー書店が原稿の購入を検討しているという情報を後からビュッシングが知った、とも解しうる。ケンペルの異母妹マリア・マグダレーナはレムゴの書籍商で後にレムゴ市長となるアルベルト・マイヤー（Albert Meyer）と1696年に結婚しているので、マイヤー書店とケンペル家は縁戚関係にあたる。それゆえケンペルの姪（彼女もマリア・マグダレーナという名前である）が死去した際に、その遺品整理にマイヤー書店の人々が関与したという可能性も推測しうる。（ただし、ケンペルの姪が死去した時点のマイヤー書店社主はクリスティアン・フリードリヒ・ヘルヴィングであった[7]。）

ショイヒツァーが仏訳者である、あるいは英訳と仏訳の両方を為したとの誤情報を含み、またオリジナル原稿発見のニュースを大々的に報道しようとする高揚感を持つにせよ、全体としてビュッシングの『週報』は、発見されたオリジナルの真贋をまず見極めようとする学術的な態度を基本としている。このことは以下の文章から明らかである。

> 「さて私が得た情報によれば、しばらく前にレムゴで死去したケンペル博士の親類女性が、このドイツ語のオリジナルを所有し、それを遺したということである。そのオリジナルは著者自身の手書きであるか、あるいはそれからのひとつの写しであるようである。それならば、かなり望ましいことである。」（26.7.1773, S.239）

ここでは慎重に最終的な判断が避けられ、発見されたオリジナルがケンペル自身の手書き原稿であるか、あるいはその写しであるという二つの可能性が示されている。周知のようにケンペルの姪の遺品の中からは2種類の原稿が発見されている。後にドームは、これを「伯父の原稿」「甥の原稿」と名付けた。すなわちケンペル自身の筆跡による原稿と、それを甥が筆写したと推測される2種類の原稿があった。ただしそれらはいずれも現存しないので、ドームの発言そのものを疑問視する研究者もいる。本論文においては、さしあたり2種の原稿がレムゴで再発見されたというドームの主張（そしてそれは、本論文の後半で見てゆくように、ビュッシングの主張でもあった）を前提にして論を進めることにする。

いずれにせよ、上のビュッシングの発言から分かるように、発見されたオリジナルに関してビュッシング自身は、それがケンペルの真筆であると即断していない。そしてこのような態度は、ビュッシング自身がオリジナル現物を目にした後も維持されている。

ケンペルの原稿発見第一報である『週報』1773年7月26日号の2週間後の8月9日号（S.249）でビュッシングは原稿の現物を自身が手にする機会を得たことを報告している。そしてさらに原稿が2種類あること、また第1の原稿にはケンペルの甥ヨハン・ヘルマン・ケンペルが書いたタイトル・ページ（これについては後述）があることを紹介した後、第2の原稿に関して次のように述べている。

> 「第2の手書き原稿にはタイトルを記した用紙がない。これはエンゲルベルト・ケンペルのオリジナルであるはずである。だがこのことを私はまだ確実であるとは考えていない。とは言え、この著

名人の他のオリジナル文書いくつかをレムゴで見つけ出し、それを当地に送ってもらえれば、容易に解決できることである。」(9.8.1773, S.250)

ここでもビュッシングは、「はずである(sollen)」というかなり強い推測の文章を記しているものの、最終的には断定を避け、別の資料との照合による筆記鑑定を待つという、慎重な態度を示している。

翌1774年になってようやく、ビュッシングは筆跡照合の結果、レムゴで再発見された原稿（のうち第２のもの）がケンペル真筆である旨を報告している。

「ケンペル博士が1687年にゴムロン(ママ)で書いた自筆の手紙が現存しているが、その手紙により、彼自身の筆跡であることが証明される。」(30.5.1774, S.184)[8]

このように、発見された原稿に対するビュッシングの態度は、きわめて学術的なものであり、ここからビュッシングが『週報』誌の性格をいかなるものたらしめようとしていたのかも推測しうる。

ところでこのようにきわめて学術的な方向性を示す『週報』誌であるが、この筆跡照合に用られたケンペルの1687年の手紙に関しては、ひとつの不思議な点がある。1727年出版の英訳版の訳者序文において訳者（ショイヒツァー）はケンペルの略伝を書いているが、その中で彼はこの手紙をケンペル略伝執筆の資料として使用している。つまりこの手紙は、いったんロンドンに渡り、その後レムゴに返却されたことになる。おそらくはビュッシングもそのように考えたのであろうし、もしその通りであるとすると、ビュッシングの筆跡鑑定には何の問題もない。

だが現在のケンペル研究からすると、事はそう単純一様ではない。手紙云々の前に、まずケンペルの『日本誌』の原稿についての複雑な流れを整理しておこう。D. マサレラが明らかにしているように[9]、『日本誌』の原稿を含むケンペルの遺品は、ほとんどが甥ヨハン・ヘルマン・ケンペルによってイギリスの収集家スローンに売却された。しかしドイツ語による出版を考えていた甥は、売却に先んじて伯父の原稿の写しを作成していた。但しこの写しが不完全なものであったので、甥は売却後、ロンドンのスローンに対して、ロンドンにある原稿の写しを送るように要請し、実際にロンドンから写しが送られた。この情報だけを勘案すると、レムゴで再発見された原稿は、実はロンドンで筆写されたものであって、ケンペル自筆ではない、ということになる。ところが、大英図書館に現存する『日本誌』には、ケンペル自筆の部分のみならず、甥が筆写した部分、そして甥以外の２人の筆写人が筆写した部分、合計４人の筆跡が混在している[10]。つまりロンドンに現存する原稿の全部分がケンペル自筆である、という訳ではないのである。ここから推測しうることは、甥ヨハン・ヘルマンとロンドンのスローンたちとの間で、原本と複写原稿の複雑なやりとりがあったらしい、ということである。

さて話を手紙に戻すと、大旅行の途上のケンペルの消息を記した重要な資料である上記1687年の手紙に関し、筆者は上に「いったんロンドンに渡り、その後レムゴに返却されたことになる」と書いた。だがもしこの手紙に関し、ちょうど『日本誌』原稿本体がそうであったように、原本と写しとが存在し、しかもロンドンとレムゴの間で複雑なやりとりが為されていたと仮定すると、実は様々なケースを考えておかねばならない。第１の可能性は、上に記したことと重複するが、レムゴにあった手紙原本がロン

ドンに渡り、それがレムゴに返却された、というものである。第2は、甥が遺品をロンドンに売却する前に伯父の手紙の写しを作り、ロンドンにはその写しを送ったという可能性である。このケースだとビュッシングが目にしたのはケンペル手紙原本である、ということになる。第3は、同じく甥が遺品をロンドンに売却する前に伯父の手紙の写しを作り、ロンドンに原本を売却して手元に写しを置いた、という可能性である。この場合、ビュッシングが目にしたのは、甥が写した手紙副本である、ということになり、ビュッシングの筆跡照合の根拠があやしくなる。ただし、もし手紙が甥により筆写された副本であったとすると、同じくビュッシングの目の前にあったケンペル『日本誌』の所謂「甥の原稿」の筆跡と一致する筈であるから、これをビュッシングが見落とすとは考え難い。第4の可能性は、甥が写しを作ることなく手紙原本をロンドンに売却し、のちにロンドンの筆写人がこれを筆写して副本を作った上でレムゴに送った、という可能性である。もしロンドンの筆写人がケンペル『日本誌』の全体の写しを作成して甥に送り、それと全く同じ筆写人が1687年の手紙も筆写して甥に送ったとしたら、ビュッシングの目の前には、同じ筆跡による『日本誌』原稿と1687年の手紙が存在することになる。この場合、筆跡照合をすれば当然、原稿と手紙が同一人物の筆跡になるはずであるが、そもそも書いたのはケンペル以外の人物である、ということになる。但しこのような可能性は、一応考えられはするが、実際問題としてビュッシングがそれに気づかない、ということはかなり考えにくい。とりわけ手紙に関して、ケンペルが兄に宛てた原本か、あるいは資料用に第三者が筆写した副本なのかは、現物を目の前にすればかなりの確率で判断が付くのではないか。

最終的には問題は未決のままに残さざるを得ないが、原本・副本の複雑なやりとりが知られていない1773年頃の段階としては、ビュッシングが『週報』編者として取った態度は、今日的観点からしても十分に学術的なものであったと評されよう。

3　タイトルの変遷

周知のようにケンペル『日本誌』は、ドーム版のタイトル„Geschichte und Beschreibung von Japan“で知られている。しかしケンペル自身が考えていた標題はそれとは別であり、現在刊行されているケンペル全集ではケンペル自身が予定していた標題である„Heutiges Japan“が与えられている[11]。

以下本項で見てゆくように、ビュッシングの『週報』誌においては、ケンペルの日本論のタイトルは3つのものが示されている。その変遷を見ると、いったいビュッシングが何について学術的に厳密たらんとし、逆に、どのような事柄について今日的基準とは別の観点を有していたか、ということが伺えるのである。

注目すべきは、『週報』誌でケンペル原稿再発見のニュースを報じた最初の記事においては、ケンペルが予定していたタイトルが紹介されている、という点である。

> 「故ケンペルは1712年、彼の『廻国奇観』序文において、次はドイツ語で『今日の日本』(das heutige Japan)という四つ折り版の本を書き、約40枚の銅版画を挿入したい、と書いていた。」

(26.7.1773, S.239)

周知のように『廻国奇観』はケンペルがラテン語で書いた書物であり、当然のことながらその序文もラテン語で書かれている。それゆえ das heutige Japan という語も、ケンペルがラテン語で書いた文章の中からタイトル部分のみをビュッシングがドイツ語に直したものである。したがって、定冠詞の有無を別とすれば、今日刊行されているケンペル全集のタイトル Heutiges Japan と殆ど同じタイトルが存在することを、1773 年時点でビュッシングが承知していたことが分かる。

だが上記の記事の2週間後、ビュッシング自身がレムゴで再発見された原稿の現物を見、そこに記されているタイトルを見て、『廻国奇観』序文におけるケンペルの予告標題とは異なることに気づき、この号では原稿に書かれているタイトルの方を尊重した記述を為しているのである。

> 「私が本誌 30 号 239 ページでケンペルの日本の歴史(Historie von Japan)について書いたことは、確実であるのみならず、私はまたわが読者に対して、渇望久しいこのドイツ語の手書き原稿を、既に私が目の前にしている、ということをお伝えすることが出来る。レムゴのマイヤー書店はそれを買い取り、学識ある有能な学士予定者 C.W. ドーム氏に送付した。私の助言と後見のもと、彼がそれを印刷用に準備するためである。」(9.8.1773, S.249)

タイトルの問題を検討する前に、ここで先に注目したいのは、上記の引用文がビュッシングの『週報』のケンペル関連記事 12 本の中で、はじめてドームの名前が出てきた所である、という点である。この引用文で用いられている「私の助言と後見」という言葉から、円熟期の学者であるビュッシング(当時 48 才)が、若きドーム(当時 21 才)に対して、日本誌ドイツ語版の出版に対して非常に強い影響力を与えたであろう、ということが推測しうる。

話をタイトルの問題に戻すと、上の引用文において書物の名前が„ Historie von Japan “になっている、という点が注目される。これに関しては同じ 1773 年 8 月 9 日号に掲載された、甥ヨハン・ヘルマン・ケンペルのタイトルとの相関であろうと思われる。上に述べたように、ビュッシングはケンペル自筆(とされる)第2の原稿とは別に、甥がタイトル・ページを書いた第1の原稿が存在することを指摘し、その長いタイトル全てを紹介している。

> 「日本の歴史(Historie von Japan)。同国の古い過去および現在の新たな国情と統治について、その名刹、宮廷、城郭、諸都市およびその他の建築物について、またその金属類、鉱物、樹木、植物、動物、鳥類および魚類などについて、また聖界および俗界の家系年代記、最初の起源の住民、礼拝、習慣および手工業者、内外人、オランダ人と中国人の商取引についての真正の記述。シャム王国についての記述を含む。医学博士・リッペ伯侍医エンゲルベルト・ケンペルにより標準ドイツ語で書かれ、図版を施された完全に固有の真正な手書き原稿に基づき、医学博士ヨハン・ヘルマン・ケンペルにより印刷に付される。」(9.8.1773, S.250)[12]

このことから分かるように、Historie von Japan というタイトルは甥ヨハン・ヘルマン・ケンペルがつけたものであるとの推測が成り立ちうる。だが、上に記したようにケンペルの『日本誌』の原稿に関しては、原本と副本とが入り乱れて存在しており、次に掲げるショイヒツァー英訳本のタイトルと上のドイツ語タイトルを比較してみると、両者に影響関係があったことが容易に推測しうる。

「日本の歴史(History of Japan)。同国の過去および現在の国情と統治について、その寺院、宮廷、城郭その他の建築物について、その金属類、鉱物、樹木、植物、動物、鳥類、魚類について、聖界および俗界の皇帝の年代記とその継承について、現地人固有の血統、宗教、習慣および生産品、またオランダ人・中国人と彼らの商取引および貿易についての報告。シャム王国についての記述を含む。」[13]

甥が与えたタイトルと英訳版のタイトルは非常によく似ている。一方が他方の翻訳に近いものであろうことは容易に想像が付く。しかし、どちらが元でどちらが翻訳なのかという問題は、一概に解決がつくとは言えない。甥が作成したタイトルが元であるとすれば、ショイヒツァーは英訳を作成するに際し、ケンペル自筆原稿のみならず、甥が作成したタイトルをも参照し、英訳版のタイトルとしてケンペル自身が予定していたものを敢えて放棄し、甥が案出したものを採用したことになる。こうした可能性の他に、他方、ショイヒツァーがまず英訳版用に長いタイトルを作成し、甥に対してケンペルの原稿の写しを送付する際にショイヒツァー作成のタイトルが混入し、それを甥がドイツ語版用に借用した、ということも考え得る。

いずれにせよ、甥が用意したタイトルと英語版のタイトルが近似していることについてはビュッシングは気づいていないようであり、甥が用意した原稿のタイトル・ページを紹介した上記の引用文の周辺で、英訳版のタイトルについて全く言及していない。

ドームは最終的に„ Historie von Japan “というタイトルを採用しなかったが、このようなドームの方針に対し、後見的立場にあるビュッシングが何らかの関与を為したかどうか、『週報』の記事からは伺えない。むしろドームの側から出されてきたタイトルをビュッシングがそのまま受け入れているように見える。1774 年、ドームはケンペル『日本誌』の原稿に関する情報をまとめて„Nachricht die Urschrift der kämpferischen Beschreibung von Japan betreffend “を発表した。ここでは、図書のタイトルそのものではないにせよ、„ Beschreibung von Japan “という表現が用いられている。そしてその同じ 1774 年 5 月 30 日の『週報』でビュッシングはドームのこの研究論文の内容を紹介し、それ以降 1779 年の最後の記事に至るまで、Historie von Japan という表現を用いなくなってしまった。そしてドーム版上巻が出版される前年の 1776 年には、いち早くドーム版のタイトルである„Geschichte und Beschreibung von Japan “を採用して、次のように述べている。

「エンゲルベルト・ケンペルの『日本誌』(Geschichte und Beschreibung von Japan)が、本来の自筆原稿に基づき正しく美しく印刷されること、そしてそれに付随する銅版画の一つ一つが新たに作成し直されること、さらにドイツがこの貴重な企画に援助の手をさしのべて欲しいことを

私は望み、提案してきた。そのことを私は後悔していない。」(19.8.1776)

このようにビュッシングはケンペルの著書のタイトルとして、まず„Das heutige Japan“、次いで„Historie von Japan “、そして最後に„Geschichte und Beschreibung von Japan “という異なる3つのものを記載しており、しかもそのどれを採用すべきかについて厳密な検討を行った様子が見られない。この点、本研究プロジェクト次号で検討するような、英訳版の一字一句にこだわって極めて厳密にドイツ語原典と英訳の異同を検討するという彼自身の態度と甚だしい乖離を見せている。啓蒙期の学術雑誌における学術的厳密性というものが、必ずしも今日と同一ものではなく、ある局面においては、今日的なパラダイムと異なる様相を呈していた、と言いうるようである。

---

[1] ビュッシングについては、拙論「ケンペル『日本誌』とビュッシング」（仙葉豊・高岡幸一・細谷行輝編『言語と文化の饗宴』英宝社、2006年に所収）を参照。

[2] Kaempfer, Engelbert: Geschichte und Beschreibung von Japan. Aus den Originalhandschriften des Verfassers herausgegeben von Christian Wilhelm Dohm. Unveränderter Neudruck des 1777-1779 im Verlag der Meyerschen Buchhandlung in Lemgo erschienenen Originalwerks. I. Bd., Stuttgart (Brockhaus) 1982, S.XL.

[3] 拙論「ケンペル『日本誌』と編者ドーム ― 「啓蒙」をめぐる議論を手がかりに―」(大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科『言語文化共同研究プロジェクト2000 ドイツ啓蒙主義研究』2001年)および「ケンペル研究の現段階」(大阪大学比較文学会『阪大比較文学』創刊号、2003年)を参照。

[4] 『週報』誌のこの号の扉ページには、„Des fünften Jahrgangs Zwölftes Stück. Am 24sten März 1774“と記されている（下線部引用者）。すなわち1774年に出版されたという記載になっているが、同誌のその他の第5巻刊行分はすべて1777年の年号が記されているので、当該の「第5巻第12号」の扉ページに書かれている1774は1777の誤植であると判断される。

[5] 『週報』からの引用は、筆者がベルリン国立図書館に依頼したコピーより行い、引用文の後に引用箇所を、刊行年月日およびページ付けをカッコにくくって示す。

[6] 『週報』9.8.1773, S.251.

[7] D.マサレラ「『日本誌』史――ケンペル『日本誌』原稿の購入と出版――」(マサレラ／ベイリー共編、中直一・小林早百合共訳『遙かなる目的地 ケンペルと徳川日本の出会い』(大阪大学出版会、1999)p.181を参照。

[8] 引用中Gomronとなっているが、別の箇所(9.8.1773, S.250)ではビュッシングはこの地名をGamronと綴っている。なおドーム版の編者序文にはこの手紙そのものが翻刻されているが(上掲注2の版、S.XXAIII)、そこではGamronと綴られている。

[9] 以下本稿における、ケンペルの遺品の売買、原稿の写しのやりとりなどに関する情報は、すべて上掲D.マサレラ「『日本誌』史――ケンペル『日本誌』原稿の購入と出版――」による。

[10] この点については拙論『ケンペルの比較文化論的研究』(平成14年度～平成15年度文部科学省 科学研究費補助金 基盤研究(C)、2004年)p.5を参照。

[11] Engelbert Kaempfer: Heutiges Japan. Herausgegeben von Wolfgang Michel und Barend J. Terwiel. In: Engelbert Kaempfer: Werke. Bd. 1/1, München (iudicium), 2001.

[12] 原文は次のようなものである。„Historie von Japan, enthaltend das merkwürdige vorigen alten und jetzigen neuen Staats und Regierung dieses Reichs, die eigentliche und wahrhafte Beschreibung der fürnehmsten Tempeln, Pallästen, Castellen, Städten und anderen Gebäuden, nicht weniger der Metallen, Mineralien, Bäume, Pflanzen, Thiere, Vögel und Fische etc., wie auch Chronologie, geist- und weltlicher Häuser, und der Einwohner ersten Ursprung, Gottesdienste, Gewohnheiten und Handwerker, so Inn- als Ausländer, den Kaufhandel der Holländer und Chinesen, nebst einer Beschreibung vom Königreich Siam, in hochteutsch beschrieben und mit Figuren versehen von Engelbert Kämpfern, M. D. und gräflich Lippl. Leibmedico, und nach dessen überall eigenen wahren Handschirft zum Druck befördert, von Johann Herrman(sic!) Kämpfer, M. D. “

[13] 雄松堂復刻本(1977)による。なお原文は次のようなものである。"The History of Japan, giving an Account of the ancient and present State and Government of that Empire; of Its Temples, Palaces, Castles and other Buildings; of its Metals, Minerals, Trees, Plants, Animals, Birds and Fishes; of The Chronology and Succession of the Emperors, Ecclesiastical and Secular; of The Original Descent, Religions, Customs, and Manufactures of the Natives, and of their Trade and Commerce with the Dutch and Chinese. Together with a Description of the Kingdom of Siam."